

4. 高良山陣所群に見る大友氏関連城郭の構造的特質

宮武 正登
佐賀県立名護屋城博物館学芸員

はじめに－小稿の目的

大友氏の関連城郭に限らず、特定の勢力下における築城技術の共通性を見出す事は、言うまでも無いが容易なことではない。その最大の理由は、各城の創築・改造履歴を明確にすることの困難さによる。残存遺構の構築時期の上限及び機能下限を地表踏査によって特定する作業はおのずと限界があり、考古学的手法に拠ってでも確定できない場合さえある。

不穏政情の慢性化により城郭の恒常的利用が全国的に定着する16世紀代になると、例えば「豊薩戦争」のような大きな戦乱を契機とせずとも、常時管理の過程で次第に補修・改造が加えられ、その結果として城郭の全体プランが成り立っていく経緯を勘案せねばならない。したがって、実年代を定め難いこうした増改築行為を含めて、特定の城郭の沿革を遺構内容から解読するためには、よほど時間軸が固定的な判断材料を別の対象から見出さねばならない。

本稿では、その問題に対応するための指標資料として、一定の効果が期待できるという意味から「陣」に注目してみたい。もとより「陣」は一過性の施設であり、その性格上、平常時管理の対象から外れ、故に構築後の二次的利用の機会が他の城に比べて極端に少ないため、使用段階の構造上の特徴を凍結的に留めるという利点がある。ただしその本来的な設置目的のために残存する確率が極端に低く、遺構そのものの現認が困難な対象でもある。ところが福岡県久留米市東部の高良山には、大友氏の軍事行動に関連する遺構が奇跡的にも極めて良質な状態で遺存している。他県の事例ではあるが、大分県下の城郭の、年代的特徴を検討する際の重要な対比史料となり得るので、以下に紹介しておきたい⁽¹⁾。

(1) なお、現地踏査に当たっては久留米市教育委員会の近澤康治氏より情報の提供等、数々の御配慮を賜った。この場にて謝意を表したい。

1. 大友氏陣跡としての可能性－文献史からの検証作業

耳納山地の西端に当たる高良山一帯は、その北・西麓を流れる筑後川と共存して筑前・肥前と筑後・肥後とを分ける障壁のごとき地勢をなしている。中世においては、筑前以北と肥後以南の勢力同士の広域間抗争に際し、相互に前線基地として重視された。大友氏にとっても、豊後を出て広大な筑紫平野に入り大宰府・博多に向かうには、日田を経た後この山系の北裾を西進するよりなかった。

中世社会を通じて北部九州の軍事上の要衝であったことを如実に物語るように、現在この山系で把握されている陣所(陣城)跡の類は8箇所を数え、史料上に散見する陣地設営の経歴は、おおまかに推移を辿っても以下のような目まぐるしさを呈している。

- ① 南北朝期…征西府の設置による懐良親王、菊池氏ら南朝勢の拠点化。一色範氏、今川了俊ら幕府勢の布陣⁽¹⁾。
- ② 寛正6年(1465)4月、菊池為安が「高良山別所城」攻めにて大友親繁軍の反撃に会い戦死(同年卯月23日付・志賀親家宛大友親繁感状写『大友文書録』所収文書⁽²⁾)。
- ③ 文亀3年(1503)11月、大友義長張陣か(年未詳11月23日付・高良山大祝宛大友義長書状「鏡山文書」〔『久・資』])。
- ④ 天文3年(1534)9月、大友義鑑、西牟田氏討伐のため高良山に軍勢派遣(〔同年〕7月29日付・城後次郎宛大友氏奉行人連署書状「直入・田北文書」〔『久・資』])。
- ⑤ 永祿12年(1569)3月、大友宗麟、高良山に布陣。龍造寺氏攻撃及び毛利氏との立花城攻防戦に臨む(本文中に史料後掲)。
- ⑥ 天正12年(1584)8月、大友義統、立花道雪・高橋紹運・朽綱宗歴らを筑後鎮定のため派遣。高良山を本営とする(本文中に史料後掲)。
- ⑦ 天正14年7月、島津軍在陣(『長谷場越前自記』、『勝部兵衛門聞書』⁽³⁾、『神代弥左衛門遺戒書』〔『久・資』他])。
- ⑧ 同15年4月、豊臣秀吉、島津氏征討の途上に張陣(『九州御動座記』〔『久・資』]、『神代弥左衛門遺戒書』他)。

『北肥戦誌』や『太宰管内誌』などの著述までを仮に持ち出すなら、さらに布陣事例は増加する。これほど頻繁な軍勢駐屯を経験した地所は、九州でも恐らく他例がないであろう。他方そのことは、筑後支配の行政拠点となる城郭として整備され、継続機能した経験をついぞ持たなかったということを証明している⁽⁴⁾。これは、当山が「九州惣鎮守」とも称された筑後一宮「高良大社」の鎮座する神域であり、鎌倉期以来、地域に隠然たる影響力を誇った社家勢力の根拠地であったことと無関係ではないだろう。

現在確認されている山系各所の城塞関連遺構群が、これら一連の軍事行動の結果として成立したことは疑いないが、きわめて大規模な遺跡であるだけに、どの時期の陣所に係る遺構として認定できるかが問題となる。

後述するように、現地に分布する畝状堅堀群や横堀、石積みなどは、南北朝・室町期の城郭においては未発達要素であり、その大半が16世紀代以後の所産であることは動かし難い。また、東西2kmにも及ぶ広大な陣域は、相当の大軍の長期滞在を意味している。したがって、上記⑦にある島津氏の3日間の在陣(天正14年7月3～5日)、⑧の豊臣秀吉の1泊滞在(天正15年4月10日)に際する構築とは考えにくい。秀吉の遠征時における工兵の圧倒的機動力はその指令書の内容から理解できるが、長期在陣ではなく移動中継の際には作事を主体としている⁽⁵⁾。ましてこの時は、南下ルート上で敵対する筑前の秋月氏を4月2日に屈服させたばかりで、その直後から工兵を高良山に先遣させ陣所築造を実施したと想定しても(無論そうした史料はないが)、わずか1週間程度でこれだけの規模の要塞を完備することは物理的に不可能であろう。なによりこの推論を待たずしても、現存する遺構群のグランド・プランからは、豊臣氏系統の城郭の特徴的要素は全く看取できない。両例とも、既存の施設の一時再利用と見るべきである。

次に、高良山社家勢力の「詰城」と仮定した場合だが、やはりその勢力規模に相応する遺構ではないと判断できる。天正12年に比定できる3月19日付の高良社大祝に充てた大友義統書状(『鏡山文書』[『久・資』])、および同日付の大宮司宛義統書状(『宗崎文書』[『前同』])では、それぞれ「東光寺」「長増山」在番に対する慰労が記されているが、「東光寺(城)」は高良山北西の尾根先端に位置する要塞で、その実態は主要陣所の一つである吉見嶽城の支堡に相当する(後述)。「長増山(城)」は「茶臼山城」として周知されており、高良山から外れて西に突出した小丘陵上に比定される。どちらも広大な高良山陣域の片隅を占める存在に過ぎず(図1参照)、社家単独による管理能力の限界を物語っている。

したがって、現存遺構の大半は、筑後守護職を兼任する豊後大友氏が主体となって、筑肥経略の際の基地として構築された陣所のものと解釈するよりない。なかんずく永禄12年の宗麟布陣、天正12年における大友軍布陣時の築造の可能性が、その時の軍事行動の規模と使用期間から判断するに、最も高いと結論付けられる。

永禄12年の宗麟出兵は、九州戦国史上最大の合戦とされる毛利氏との立花山城攻防戦に移行するわけだが、「五方国に御人数被奉待候」(『豊前覚書』⁽⁶⁾)という大軍勢の高良山集結の後、戸次道雪が「敵味方及三十箇国諸勢出合穀之内対陣」⁽⁷⁾と評した闘ぎあいの本営として、当山が使用されたことになる。おのずと設営された陣所の大きさが窺い知れよう。

この時、宗麟自身は同年3月22日以前には着陣していたと考えられるが(同日付・「鶴原掃部入道」宛大友宗麟書状写『大友文書録』所収文書[『編・大』22])、その帰還時期が明確ではない。『北肥戦誌』は「大友入道宗麟は年内高良山を立てて府内に馬を納られけり」⁽⁸⁾と記すが、これを証するだけの史料に不足する。卯月18日付の高良社大祝宛宗麟書状写(『鏡山家旧記写』所収文書[『久・資』])により4月中旬まで滞在していることが確実だが、9月13日に筑後鷹尾城主の田尻鑑種に宛てた宗麟書状⁽⁹⁾に「既宗麟出張之上者、弥々以長陣、可被勵馳走事」との文言が見え、なおその時点で在陣中の可能性が高い。いずれにせよ、毛利氏との緊張関係は翌元亀元年2月の將軍足利義昭の仲介による和解成立まで続き、その時の宗麟宛義昭書状(2月3日付・『大友文書録』所収文書[『編・大』23])にある「今度、永々令在陣、悉属本意、早速帰陣珍重候」との慣用句の書出を積極的に捉えれば、高良山の軍事的重要性はこの段階まで持続していたと解することができる。現にこの和解直後の3月から、宗麟は再び筑後を足がかりに佐嘉の龍造寺隆信攻撃を開始している⁽¹⁰⁾。

要するに、高良山陣所には、宗麟本軍が6ヶ月以上にわたって連続滞在しているわけで、その遺構からは、1570年前後の大友氏城郭の防衛思想を解説する上で極めて有用な情報を得ることができる。なお、『豊前覚書』には「屋形様御陣所高良山ノよし嶽取誘」と明記しており、高良大社の北西に位置する吉見嶽城跡がこれに比定できる。

次いで天正12年の大友軍布陣だが、龍造寺隆信の横死に伴う九州の勢力均衡の崩壊に当たり、筑後での主導権奪回と島津軍北上への牽制策とを兼ねた派兵であって、耳川の敗戦以来、急速な衰退を示す大友氏勢力にとって「乾坤一擲」の軍事行動であった。したがって、具体的軍兵の員数こそ知り得ないものの、戸次道雪・高橋紹運・朽網宗歴の3重臣を主力とし筑後国内の大友派在地領主を召集させ、黒木氏、草野氏、星野氏らの離反勢力を攻撃し、さらに龍造寺家晴と対峙する等といった連戦の様子から見ても、一定の大軍が派遣されたものと推測される。この時の大友勢の高良山在陣期間は、戦局の変化に応じた途中下山もあるが、天正12年の8月⁽¹¹⁾から翌年9月末⁽¹²⁾にかけてという長期間に及んでおり、陣施設の充実化が当然推定できる。

加えて、この時の布陣は大友義統本軍の出兵を前提としていた向きがあり、『豊前覚書』には「豊州御人数今日々と御待被成候へ共、遂豊後衆無出張、申酉兩年、道雪様・紹運様高良山ニ而徒二日送被成候」と記されている。さらに、攻略の主導的役割を担った道雪・紹運と高橋統増・立花統虎の4将が、出兵事前の留意事項を列記し連署している7月18日付(天正12年)の覚書⁽¹³⁾には、「御屋形様御陳所之事、付、至親家能々可被成御熟談事」とある。このため遺構分析に当たっては、大友家当主の本陣としての再整備が計画された可能性をも考慮しておく必要が生じてくる。

以上のように、高良山の遺構群は、2度にわたる大友氏の大規模な陣所設営を経て形成されたものと見て良く、当該段階の豊後国内で最も成熟した実戦的な築城技術が応用されたことは想像に難くない。

註

- (1) この南北朝期の軍事行動は、特に複雑かつ目まぐるしい推移を示すので、ここでは経過を触れない。詳細は、小川信『中世都市「府中」の展開』369～370頁（思文閣出版2001）を参照されたい。
- (2) 『久留米市史』第7巻（資料編―古代・中世、1992）。以下同書出典の史料は『久・資』と略す。
- (3) ともに『後編旧記雑録』巻十七所収（『鹿児島県史料―旧記雑録後編2』1982）。
- (4) 事実、ここが特定勢力による筑後統治の行政府となったことを示す徴証はなく、正平8～16年（1353～61）と文中元～3年（1372～74）の2度にわたって西征將軍府が置かれているが（前注〔2〕小川氏著書346～347頁）、これはあくまでも幕府方の圧迫による大宰府からの一時退避が長期化した結果であって、永続的な拠点構築を前提としてこの場所を選択したものではない。
- (5) 接收し破却した城の部材を再利用して陣所（「御座所」）の建築物設営を実施している様子は、九州、関東、奥羽攻略時の史料上に散見できる（〔天正18年〕7月28日付・伏屋十内他宛豊臣秀吉朱印状「大阪城天守閣収蔵蔵文書」〔跡部信他「平成8年度新収蔵資料紹介」『大阪城天守閣紀要』26 1998〕他）。
- (6) 川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『博多・筑前史料 豊前覚書』（文献出版 1980）。
- (7) 天正3年5月28日付・「きんちよ」宛戸次道雪讃状「立花家文書」（田北学『増補訂正編年大友史料』23〔私家本 1966〕。以下同出典の場合「編・大」巻数と略記する）。
- (8) 千住武次郎編『肥前叢書』第2輯（肥前史談會1939―青潮社1973復刻）。
- (9) 「田尻家文書」（『佐賀県資料集成』第17巻）。
- (10) 有名な今山夜戦に繋がるこの時の肥前侵攻に関して、宗麟は高良山を再び本陣としたと諸書に記されるが、実際にはそれを裏付ける直接的史料を見出せない。『北肥戦誌』は同年3月中旬から10月3日までの高良山在陣を記すが、その著述の根拠が今一つ判然としないのである。2月18日にイエズス会宣教師アルメイダが日田で宗麟に謁見していることから（「1570年10月25（15）日付、平戸発信、ルイス・デ・アルメイダのイエズス会司祭および修道士宛書簡」〔『大分の中世城館―第二集 文献史料編2』大分県教育委員会2003〕）、臼杵を出て豊後国境まで進駐したのは確実のようだ。肥前今山の敗戦の報に接した宗麟が8月23日に田尻鑑種に宛てた書状（「田尻家文書」・前注〔9〕）には「宗麟事も千栗迄急度可差寄候條…」とあるが、肥筑国境の筑後川渡河点である千栗（佐賀県北茂安町）を覗いているところからすると、この時実際に高良山に布陣していたことの傍証となるかもしれない。
- (11) 「去月廿八日以来至高良山、被遂在山…」（9月6日付・「三原山城守」宛大友義統書状「三原文書」〔『久・資』〕）。
- (12) 『上井覚軒日記』天正13年9月25条 「高良山北野之豊陳二当候て、火色顕然候、定而敗北候哉之由也」、同月29日条「高良・北野豊陳敗北候由也」（『大日本古記録 上井覚軒日記・下』岩波書店1957）。
- (13) 柴田礼能・葛西宗筈宛高橋紹運外三名連署覚書「森文書」（芥川龍男・福川一徳編校訂『西国武士団関係史料集3 森文書』文献出版1992）。なお、この場合は行軍途上での陣所を指している可能性を再考せねばなるまい。

2. 各陣の構造上の特徴

高良山系における遺構の広がりについて、筆者もまだ全容を完全に把握しているわけではないが、主要部だけを見てもその分布範囲は、九州自動車道の沿線を最西端として東西約2km以上に及び、南北は長軸1.2kmに達する（図1参照）。その中で、遺構群に一定のまとまりを持つ区域が3箇所あり、西より吉見嶽城、杉ノ城（住厭城）、別所城（毘沙門岳城）というように、それぞれの高所を利用した個別の「陣城」として従来から理解されてきた。しかし実質的には、以下で解説するようにほとんど連続する一つの陣域として機能したものと見て良い。この他にも、鶴ノ城、磐井城などの個別把握されている陣城の比定地が隣接しており、正確な範囲はさらに広がる可能性が大である。なお、史料上には「高良山城」などといった呼称例はなく、「陣」という本来の性格に即した表記が主なのだが、現在の遺跡名称では「城」となっているため、本稿では煩いを避ける目的から便宜上それに従うこととする⁽¹⁾

(1) 別所城（毘沙門岳城）―図2

最東端に位置する陣所で、標高312mの毘沙門岳（＝高良山頂）を占有する。最高所にある主郭A自体は小規模で、その南西に向かって延びる尾根B上の曲輪との一体化が顕著だが、これらは頗る単純な空間配列をなし、虎口の位置・形状も曖昧である。北西側の尾根Cは「久留米市つつじ公園」整備の進行により旧態が著しく損なわれており、構造上の特色を知り得ない状況だが、同様のプランに基づいていたものと考えられる。

主郭から東尾根Dにかけての北側斜面には、堀切から派生する堅堀を基軸とした畝状堅堀群Eが付随しており、その下位には長さ40m程の土塁を片岸に見立てた横堀Fが残存する。この尾根D先端は、南北から迫る谷に挟まれて土橋状に縊れた鞍部Gに接しており、天然の大堀切に相当する遮断性の強い地勢に依拠している。これより東方を横断している耳納山経路の峠道や、しばしば大友氏に抵抗した草野氏の本城・発心岳城などの存在を強く意識しているものと見て良い。また尾根B上の曲輪群でも、鞍部Gを形作る谷に面した側の東辺土塁全体を土塁で網羅しており、陣の中心的役割が、連山稜線をつたって東方向から侵攻する動きの阻止に置かれていたことが明らかである。

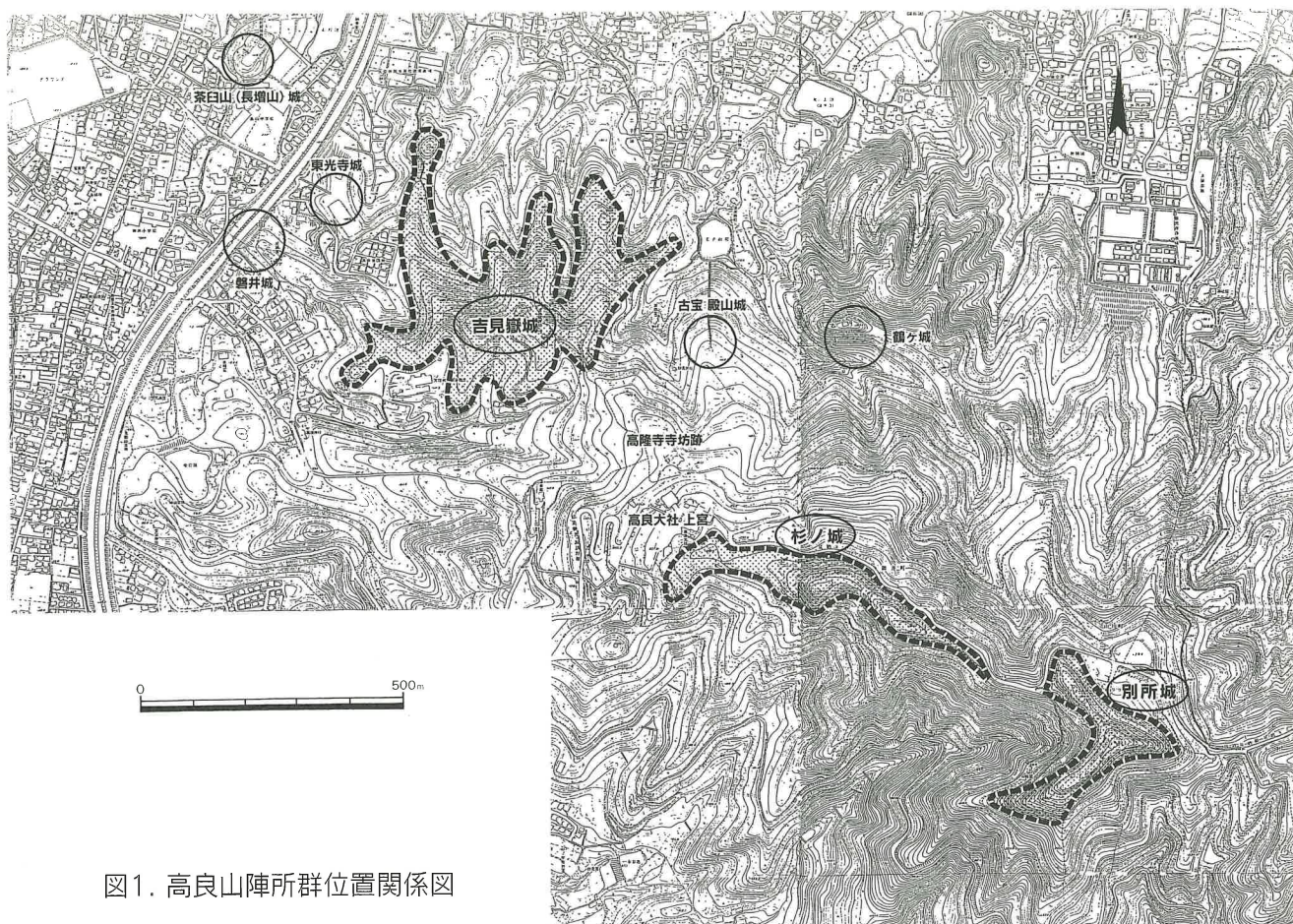


図1. 高良山陣所群位置関係図

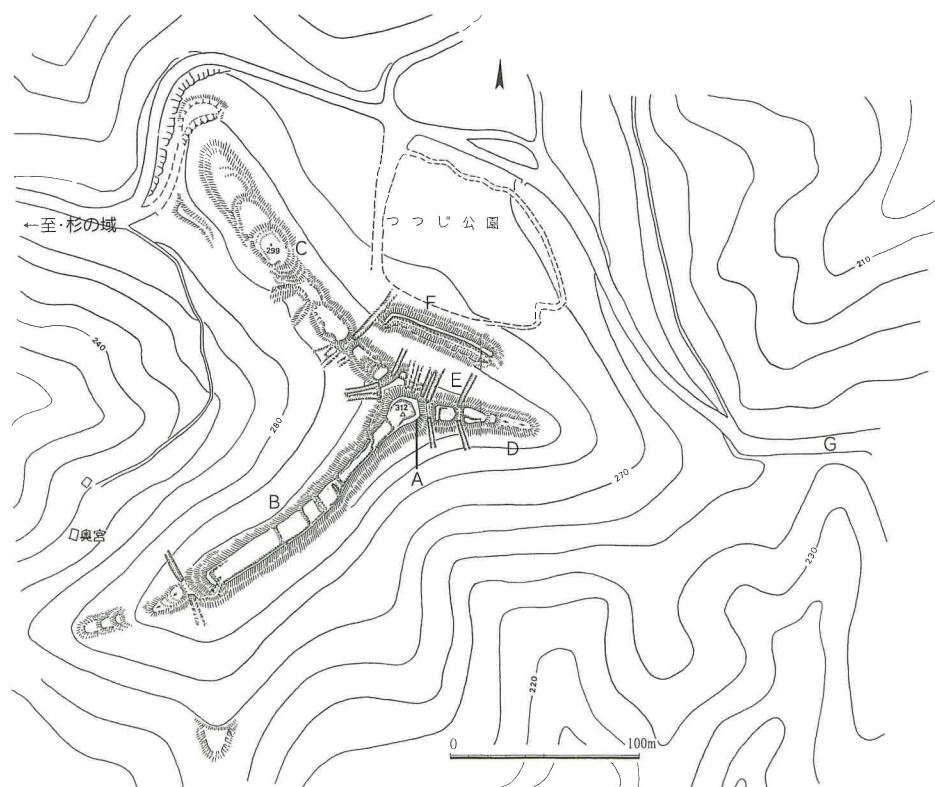


図2 別所城縄張り図 (宮武 踏査・作図)

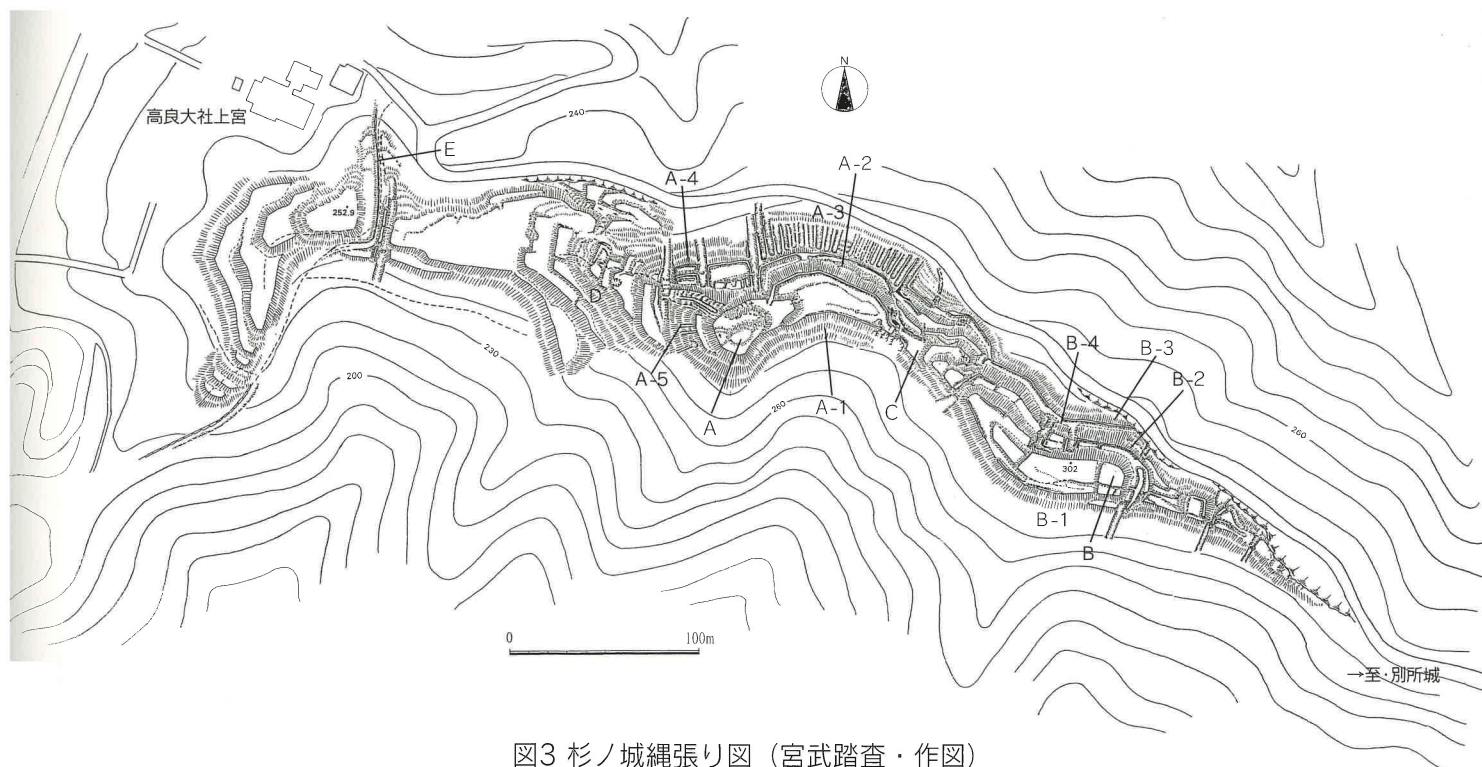


図3 杉ノ城縄張り図（宮武踏査・作図）

諸伝では懷良親王が拠点として構築したとされるが⁽²⁾、南北朝期にまで遡及できる構造ではない。先に掲げた寛正6年の大友・菊池抗争時の史料に登場する「高良山別所城」時期が、正しくこの陣城に該当するであろう。各曲輪の狭小な敷地規模や簡略な曲輪配列がこの段階の骨格の継承を示すと考えられる一方、畝状堅堀や横堀の存在が戦国後半期における総改修を明示している。やはり宗麟在陣以後に、現況形態の成立を求めるべきだろう。

(2) 杉ノ城（住厭城）－図3

別所城の北西尾根Cの先端付近から西へ連続する尾根上に展開する陣城である。両陣間を耳納山スカイラインが通過しているため分立しているようにも見えるが、相互の間隔は50m程度の至近距離にあり、実態としては直結した一つの陣所と解釈できる。

東西650mにわたって遺構群が密集しており、西端は高良大社上宮の境内と接して、本殿裏山の本宮山を取り込んでいる。興味深いことに、朝鮮式山城として著名な高良山神籠石の一部を曲輪切岸として利用している部分が認められる(E)。

東西2ヵ所のピークに中核的な曲輪A・Bを配し、両者の前後に多数の防御施設を付随させ、中央の鞍部に設けた曲輪Cを介して相互を連結する基本構造にある。西側の曲輪Aには大きな副郭A-1が付属することから、こちらの方が陣内での中心的機能を担っていたとも判断できよう。A-1は南北長軸65m・東西長軸23mに及ぶ広い曲輪で、周囲には土塁（厳密には石塁の残痕）が廻り、生活機能の集中をも想像させる平面規模を誇る。この副郭に対して主郭Aは、内部空間の平坦地化が粗雑で、自然地形の全くの転用に近い状態にある。こうした土木施工上のアンバランスさは、一般の城郭との相違点を端的に示しており、「陣所」ならではの特徴とも言えるだろう⁽³⁾。

このA+A-1の関係と同様に、Bの西隣にもB-1が付随し、同じ空間構成を主軸とした2つの曲輪群体が、Cを境にして向き合うような配列を示すが、C北縁の土塁の西端には虎口と見られる開口部が認められ、北下を走る帯曲輪群に連絡している。開口部の脇には残存高1.2m程の石積みも施されており、塁面の耐久力強化への配慮も認められるなど、陣内の主径路上のジャンクションに相当するCの役割の重要性が窺われる。

B～B-1の北裾には、曲輪東面を仕切る堀切から派生した横堀B-2が回り込み、その下段にも横堀B-3が随走している。一方、A～A-1の北側にも横堀A-2が取り付いており、結果、両エリアに跨る250m以上に及ぶ防御線が、堅堀を仲介しながら陣北麓を遮断するように展開している。この遺構群から解読できる防備の主方向は、別所城における横堀Fと畝状堅堀Eの設置意図とも整合するもので、両陣が一体的に機能していたことの傍証にもなり得る。

そしてこの陣のプランで最も目を引くのが、横堀A-2の外岸下の斜面を完全網羅した畝状堅堀群A-3である。全部で22条の堅堀が視認できるが、極めて規格性の高い造作であり、「畝」も石積みで補強されていた様子が看取できる。大友氏の領国下での、土木施工能力の発展度を知るための好素材と言って良い。

※…近世期以後の開発行為で改変が著しいため積極的図化をしていないが、人工による階段状地形が続くエリア

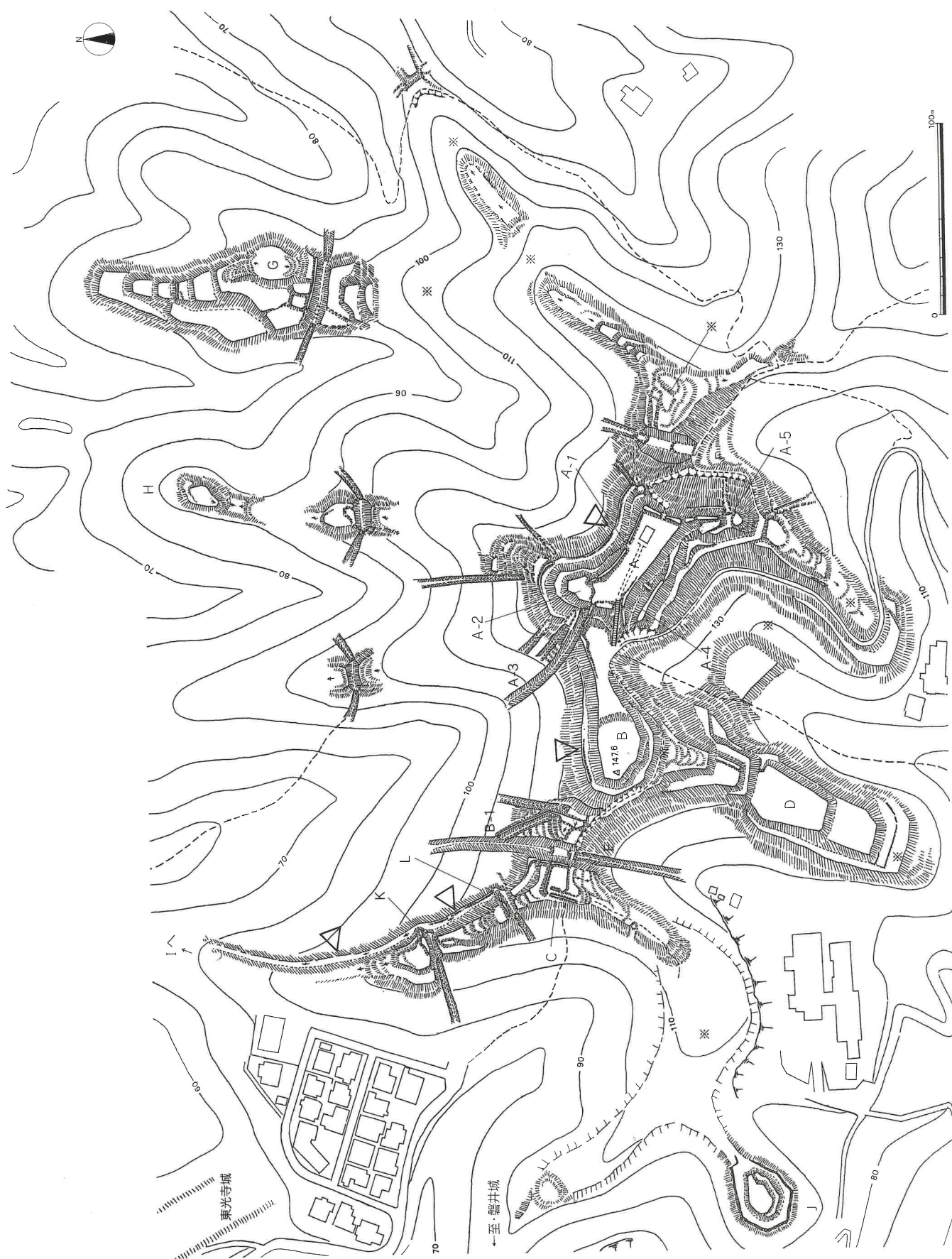


図4 吉見嶽城縄張り図 (宮武 踏査・作図)

(3) 吉見嶽城一図4

杉ノ城西端から直線距離で480mほど北西に離れた地点にあり、標高157mの半独立丘陵一帯に遺構が展開している。杉ノ城との間には高良大社上宮とその神宮寺である高隆寺寺坊を挟むため、相互間隔が若干離れる位置関係にある。しかし、社家自体が大友氏への帰属を基本姿勢としていたことからすると、両陣間の連絡上に大きな障害はなかったであろう。

永禄時の宗麟本陣に該当し、山頂にある平面長方形の主郭Aを中心とする南北320m×東西360mの範囲で曲輪が連続しており、北・西に向かって長く延びる複数の尾根の先端付近には、堀切や出丸に類する施設群が分布している⁽⁴⁾。

主郭Aの規模は東西55m×南北22mを測り、東・西・北の3辺と南辺の一部に土塁を設けている。北辺中央部に平入り虎口A-1が開口し北下の帯曲輪に連絡しており、この径路を補佐する意図から、主郭北西隅には腰曲輪A-2が突出している。その西隣の12mほど下位に、第二郭に相当する規模の曲輪Bがあるが、こちらは地形に規制された平面形をなし土塁も完備されていない。主郭の優位性が如実に表れた曲輪形状・配置関係となっており、空間序列から言えば単郭構造の中心部と見なせる。

Bの南側尾根から主郭南下の谷筋にかけては無数の塁段が密集し、軍勢の駐屯スペースの確保を推測せしめる(現況は竹林・荒地だが、後世の耕地との判別が困難)。尾根中央には主郭に順ずる敷地面積の曲輪Dが存在するが、土塁等の明確な遮蔽施設は認められない。

曲輪Bの西には上幅約8mの堀切Eがあり、主郭Aの東側には深さ10m前後を測る巨大な堀切Fが設けられ、中心郭群の東西の境界を規定しているが、その外側にも遺構群が展開している。堀切Fの東岸上のピークから北に延びる尾根には、曲輪の残痕としい階段状地形の連続が観察でき、その北端には支塁Gが存在する。自然丘陵を転用した主郭を起点として腰曲輪を階段状に配したシンプルなプランながら、尾根との境界部には土塁を併走させた幅4m前後の堀切を設定し、自己完結的な空間を形成している。こうした「出城」とも言うべき半独立の駐屯施設が、各尾根の先端に分布していたものと見られ、植林・公園化などの改変が著しいH・I・Jでも同様の支塁設置の蓋然性が指摘できる。前述のように、磐井城、東光寺城(ともに開発による破壊が進行)の性格についても、これと同じ広域防備の構想に位置付けて理解すべきで、この吉見嶽陣城の構造的特徴を構成する一要素になっていると考えられる。これにより、広義の陣域は南北450m・東西800mに及ぶ山系を取り込んだものと見なせる。

もう一つの大きな特徴として、主郭北裾を起点とした帯曲輪・横堀ラインの発達が挙げられる。各所で堅堀に遮られる形にあるため完全な連結状態にこそないが、横堀機能を兼備した帯曲輪が、主郭北東裾の塁線に沿って副郭との連結部まで至り、さらに畝状堅堀群A-3を越えると曲輪B北下の帯曲輪が出発し、堀切Eの西から再び始まって尾根の東斜面沿いを北上している(図中△印)。特に堀切L以西の曲輪群に付属する帯曲輪は長さ100m以上の走向が確認でき、その先は植林地との峻別をつけにくい現状ながら、延長痕跡をさらに北へ辿ることが可能で、最終的には尾根端部にある支塁Iまで直結していたものと見られる。北方からの攻撃に対抗する意図からの防衛線であることが明確であり、主郭から突出する小曲輪A-2も、その補強機能を兼備していた様子が見えてくる。

このように、筑前・肥前国境を睨む構築目的に立脚した陣であることが、平面構造上の特色からも確認できるのである。

註

- (1) 一般的な「陣」のイメージを下敷きにして、それよりも規模が大きく高水準にあるという“漠然とした”ニュアンスを表現する意図から、「陣城」との用語が実態の吟味に関わりなく使用される傾向がある。しかし、実際に当該期に使用された歴史的用語・概念として普遍的なものかどうか、甚だ曖昧なのである(宮武「陣」を再考するー武家社会下の仮設要塞の実態」『歴博』第114号 国立歴史民俗博物館2002)。この用語は『応仁別記』や『安西軍策』等の中にいくつか散見できるものの、発受給文書等の一次史料上に見出すことは容易ではない。近年、恒常性と臨時性のバランスから城郭の属性を再整理しようとする試み(松岡進『戦国期城館群の景観』校倉書房2002)も現れてきているだけに、この用語の使用に当たっては、より慎重さが求められるべきであろう。
- (2) 『久留米市史』第1巻(通史編、1981)、児玉幸多他監修『日本城郭大系』第18巻ー福岡・熊本・鹿児島(新人物往来社1979)他。
- (3) 下野の要衝として上杉・北条・佐竹各氏らが度々布陣したことで著名な多々木陣(栃木県)、尼子氏が安芸郡山城に毛利氏を包囲した時の本陣とした風越山(広島県)、肥前筑紫氏の勝尾城下「総構」に付設された支塁である葛籠城(佐賀県)など、「陣」に代表される恒常的使用度の低い軍事施設が通有する特徴であり、主郭よりもその周囲での土木力投入が勝っている点で共通する。必ずしも構築年代の新旧を語る形態とは限らない。
- (4) 昭和49年(1974)に山口淳・近澤康治両氏が中心部分のみの測量調査を実施しており、その成果は『久留米市史』第12巻(資料編ー考古、1994)で紹介されているので参考とした。当時の考古学界全体の動向を考えれば、極めて先駆的な調査であったはずで、研究史上で再評価されてしかるべき仕事である。

3. 遺構内容から見た各陣所の成立背景

これら3つの陣所の特徴を並べて概観してみると、山系北麓からの外圧に対する牽制という基本コンセプトが、3陣の構築にあたって徹底されている点が容易に理解できる。別所城の畝状堅堀Eと横堀F、杉ノ城の横堀群(A-2、B-2・3)と畝状堅堀A-3、吉見嶽城の支塀群と横堀・帯曲輪群は、全体として長大な防衛線を形成するための構成要素であったことが解る。各支塀は防衛線維持のため最前面に展開するが、それ以外のほとんどの曲輪空間は、このラインの内側(南)に納まる形になっている。この設計理念は、杉ノ城の重層的配列を示す横堀や主要な堅堀が、全て北に対向している様子に最も明確な形で現れている。さらに、吉見嶽城の主郭土塁が南側塀線を開放して走行している上に、南裾の谷頭を囲むような勢いで主郭南東・南西隅から単独の土塁が法面上にまで延び出しているなど、各陣のプランの細かな部位においても体现されていることが解る。また、吉見嶽城の堀切E西岸を形成する曲輪Cにも、主郭と同じ理念がコンパクトな形で反映されており、北・東・西の三辺に小規模な土塁を設定し、そのうち西辺土塁を曲輪外部に長く延ばして南からの導入部を形成している。

こうした構築目的の一貫性が各陣で看取できる一方で、それぞれの空間配列の面では著しい差異がある。とりわけ吉見嶽城における中枢部優位のプランは、杉ノ城の「二頭式」(隣接する別所城の主要部を含めると「三頭」になるが)とも言える中核部の分立状態と比べた時、その求心力の強さが余計に際立って見える。この相違は、吉見嶽が宗麟自身の「御座所」という性格を持つ点に直接的理由が求められ、そしてこの形態のアウトラインは、天正時の義統動座計画においても継承されたのではないだろうか。

ところが杉ノ城には、本陣である吉見嶽城には見られない縄張上の卓越性が指摘できる。杉ノ城を特徴付けている畝状堅堀群は、前述したように見事な統一的仕様に基いており、石積みによる「畝」構築技術に加えて、空堀A-2との連携による防備の相乗効果が図られている。また、単独で設けられている堅堀も、すべて腰曲輪との併置状態にある。特に注目すべき部位がA-4とB-4の2段の腰曲輪で、「横矢掛」のように塀線から突出する構造までにはないが、両サイドに堅堀を深く引き入れることで、①横方向への死角を生み易い帯曲輪の短所の解消、②帯曲輪突破の事態に対処するための分断、③堅堀対岸の曲輪との連携による一種の「合横矢」効果の付加、といった多機能を有したものと見て取れる。斜面の遮断という堅堀の基本的効能を応用しつつも、守兵の足元近くまで攻め手を引き込んだの白兵戦をも想定した工夫が凝らされているのである。

しかし、これらと同等レベルの縄張上のテクニックは、吉見嶽城にはあまり投入されていない。畝状堅堀群の形態を比較しても、主郭北西の堅堀群A-3は幅員・深さ・起点ともに一様ではなく、畝の構築も一部分に留まる。副郭北西下の堅堀列B-1も、並走して設置することで得られる根本的效果性から逸脱してしまっている。各所にある堀切も単発的な分布を示し、横堀と直結して隣接する曲輪を囲いこむ意識は希薄である。複数の堀切に挟まれた空間の斜面部を堅堀で埋めるような発想もない。これらの点のみを重視するなら、小型ながら畝状堅堀群Eを備えた別所城の方が、むしろ技巧的とも言える。

この相違の理由については、永禄時と天正時との2度の長期使用による、微妙な時期差の表出と見るのが妥当であろう。杉ノ城に比して古的な手法が目立つ吉見嶽城は、その意味において正しく永禄段階の宗麟本陣なのであり、より先進的構築法を明瞭に留める杉ノ城・別所城は、天正の布陣での大友氏重臣層の共同による陣所設営の結果と見られる。後者における中心郭群の分立構成の意味は、この背景から考えると理解できる。

ただしこのことは、吉見嶽城が天正段階に全く再整備されなかったことを意味するものではない。それは、具体的に遺構の実態に現れている。例えば、主郭南下には土橋を伴う横堀A-4が見られるが、塀線全体を網羅する状態になっておらず、東端は極めて曖昧な処理の形となって消滅しており、しかも土橋からは主郭へ登頂することができないという最大の矛盾点を抱えている。また、堅堀列B-1の西側堅堀の末端は、堀切Eから派生した大型の堅堀によってモノの見事に断ち切られており、大堅堀の東岸にはその断面が露になっている。つまりこれらは、増改築実施を示す痕跡に他ならない。主郭南東隅から派生する土塁先端と小規模な堀切A-5との関係にしても、その発揮する遮断機能の方向を異にしている点で同化しきれていない印象を持たせるが、これも同じ解釈を適用できるだろう。

それでは、改築に着手しながらも、杉ノ城と同等水準の縄張り手法が駆使されていないのはなぜか。この問題は、山系全体の陣施設に配分された防備の力点を分析した上で再考すべきで、今は即断を避けたいが、開戦当初の予定であった大友義統着座が延引されるに従い―しかも先延ばしの挙句に中止となったわけだが―、陣全体の指揮系統が実質的には杉ノ城へ集約されていったことを想像させるのである。

他方、杉ノ城の西端付近、曲輪Aの西側斜面に見られる小規模な畝状堅堀A-5や不規則な配列の腰曲輪群Dの存在は、永禄段階の陣施設の踏襲を示すものと考えたい⁽¹⁾。また、別所城の畝状堅堀Eと横堀Fの関係も、本来の有機的セット関係から言うと上下が逆の配列にある。維持管理上の観点に立てば、横堀FはEから流れる雨水や土砂に絶えず晒される状態にあり(実際、Fの底部には「堀障子」と見紛う性格不明の起伏が幾つも認められる)、やはりこれも両者の付設時期が微妙に異なることで生じた現象と推測できる。

(1) 千田嘉博氏は長野城(福岡県北九州市)の大規模な畝状堅堀群について、永禄8年にはその基本形が成立していたと考察し、この種の遺構を有する九州地方の城郭の年代観を探る上で、注目すべき見解を提示している(『長野城―長野城の分布・確認調査―』第6章第1節 北九州市教育委員会2000)。

おわりに一大分県下の諸城との対比の中で―

前節で見たように、固定的な時間軸の中で機能した高良山陣所群であっても、1570年前後と1580年代半ばとの間の僅か14、5年の時間推移の中で、築造技術の内容に明らかな格差が生じていたことが理解できる。特に今回は、畝状堅堀群の規格的発達に度合、腰曲輪と堅堀との連動性、堀切と横堀との一体化の状態などに、縄張りの計画性と技巧上の精度の面での差異が、顕著に現れていることを確認したわけである。

では、この各パーツの特徴を大分県下の城郭に対比させると、どのようになるのだろうか。

防備ラインの徹底に対する拘りは、大友本城の高崎城(大分市)に特にはっきりと表れており⁽¹⁾、妙見嶽城(院内町)主郭の西～北西尾根の一部に部分的採用が窺われ、日指城(山香町)、天面山城(大分市)、高城(大野町)などにも積極性は乏しいが同じ意識が働いている。西日本の中世山城の中でも“異彩を放つ”存在と言って良い耶馬溪町の長岩城だが、その奇矯な構造の意味を考えるには、この防衛論理に立つよりないであろう。

高良山陣の畝状堅堀群に見られる2つのタイプのうち、吉見嶽城や杉ノ城西端に残る比較的粗放な配列のものは、妙見嶽城⁽²⁾、立石城(山香町)、野田城(玖珠町)、水ヶ城(臼杵市)、高尾城(緒方町)などに見られる。高崎城の例も、堅堀相互の間隔が開き「畝」の構築が曖昧な状況からすると、同種の古的な様式の範疇に含めて良いだろう。これらは規模の大小に関わらず、土塁や横堀などとの相互連携の意識が低いという点でも共通している。

対するに、杉ノ城・別所城の規格的なタイプの畝状堅堀群になると、松牟礼城(直入町)を典型として小岳城(大分市)、角牟礼城(玖珠町)などに見られ、非常に小規模ながら宇佐市の山本砦にも整然さが見て取れる。院内町の副城や日田市の高井岳城、九重町の松木城では横堀との連結意識が顕著であり、天正14年の島津氏の府内侵攻に対する最終防衛の拠点となった大分市の鶴ヶ城にも同類型の堅堀群が存在する点は重要であろう。

これらの内容差を、永禄12年と天正12年の定点的年代観に直結させることは極めて乱暴な話であり、筆者も現段階では、この傾向の普遍妥当性を殊更に強調するつもりは無い。しかし、高良山の遺構群を指標とした比較検証を今後も進めることによって、少なくとも宗麟期から義統期へという緩やかな時間枠での変化(=15世紀第3四半期から第4四半期へ)ならば、大友氏関係城郭の技術的編年の絞り込みが実現するものと予見できる。

付―高崎城との対比

最後に、高良山陣と大友氏の本城である高崎城(105～106頁・第87図)とを比較した時、見えてくる事柄について若干触れておきたい。

第一に、城外の特定方向に面して長く防御線を連続させる理念が、この城にも適用されている点に気付く。山頂にある主郭(曲輪Ⅰ)南裾から城域東端の曲輪群まで、南面する一本の帯曲輪を貫通させ、その縁辺に石塁を付設し部分的に横堀の機能を持たせる発想は、正しく高良山陣城の特徴に通ずる。最終期の主郭とらしい曲輪Ⅱの、東に連なる列状配置の曲輪群が、この帯曲輪へ出るための虎口をそれぞれに備えている点が明示しているように、城内の各ユニットを相互連絡するための主要経路としての役割を果たすと同時に、各曲輪内の兵卒を一斉に、しかもスムーズに石塁際へ配置することを眼目とした構造となっている。別言すればこの特徴は、曲輪相互の有機結合による城内導線の複雑化をもって迎撃の効率化を指向した近畿型(いわゆる「織豊系」)の城郭との、決定的な理念上の相違を示していると言って良い。

この狭長な帯曲輪に拘りながらも、一方では侵入時を想定して部分封鎖をも図りたいというジレンマを解消すべく、数箇所石塁を檜台状に肥大させて曲輪幅を“絞る”(恐らく「木戸」等の作事を伴う)策を採用している。この発想は吉見嶽城にも見る事ができ、曲輪Cの北西尾根に続く帯曲輪が、尾根上の曲輪から突出する土塁によって、仕切られるように幅員を狭めている箇所が認められる(K、L)。高崎城では、より恒久性を持たせて石塁を用いているが、両者の機能に質的格差はない。曲輪Ⅱ南西隅の堀切ラインと接する部分に、曲輪Ⅱの法面から石塁が帯曲輪に向かって突出していた痕跡があるが、これにいたっては部位・形状ともに吉見嶽城のものと全く同種の遺構と評価できる。

ところで、高崎城をめぐるのは、豊臣政権下に服属した大友義統による改修の可能性が取り沙汰されているが⁽³⁾、筆者は前記のような縄張上の骨子から見ても、なお検討を要する点が多いと判断している。石積み技法の駆使や主要虎口の平面構造、堅堀横の「登り石垣」状の構築物など、確かに目を引く部分が多いが、いずれも豊臣氏系統の築城技術とは「似て非なる」ものと評価せざるを得ないからである。

石垣構築技術で言えば、勾配角度の調節方法が確立していない在地系城郭に特有の「段積み」が基調となっている(曲輪Ⅱ東面、石塁の各所)。隅角部は、「算木積み」未発達のために「立石」で代用するか(曲輪Ⅱ正面虎口)、ランダムな重ね積み

により曲線に仕立てるしかない(前同北東隅部)中世期の技術限界が明瞭に現れている。一部の石垣には、面の平滑化を意識した石材吟味が看守でき、その点ではさすがに大友本城としての「意匠手間」を感じるのだが、肝心の配石状況に関しては杉ノ城の石積みと変わらない発展段階にある。とは言え、臨時の陣営であってさえも畝状堅堀の「畝」を石塁化する程なのだから、大友氏独自の石積み技術の再評価も必要であるが⁽⁴⁾、高崎城の堅堀脇石塁もその構造からすると(注視すればこれも「二段積み」であることが解る)、近畿系の技術に頼らずとも自前の工法で創出可能な構築物と判断できる。

最終的にこの城では、帯曲輪完備に依存する防衛方針を整理縮小し、曲輪Ⅱを実質的主郭として再整備しその求心力下に列状曲輪群を統合して、堀切・堅堀と石塁でこのエリアを区切り直した結果(その時点で旧主郭部の中枢機能が移転)、現在の姿が出来たものと見たい。これこそが、島津氏侵攻に備えた天正14年の改修⁽⁵⁾における基本構想であったと考えられ、その新たな主要部の境界施設として堅堀脇の石塁が必要となったと捉えられる。

虎口についても、仔細に観察すると全て「平入り」構造ないし城道「2折」のアレンジ形態が基本である。問題となるのが南東部の推定「大手口」で、2基の櫓台に挟まれた開口部が一見テクニカルな印象を与えるが、西側櫓台の設置主眼は虎口前面のスロープに対する牽制と門口の保護にあって、コースラインの折曲の規定を一義とした措置とは考えにくい。佐賀県の三瀬城(神代氏)や住吉城(武雄後藤氏)など、他地方の戦国期領主拠点となる城郭にも同じ虎口防護の発想の具体例が認められ、県下の副城や御所ノ陣(国東町)にも片袖の土塁を肥大させた虎口が存在する。東側の櫓になると、わざわざ開口部から距離を置き、虎口に向けての直接的な「横矢」機能を発揮しにくい位置を選んでいる。この両櫓台の現実的機能としては、虎口前面へ接近途中の攻め手に対する牽制を主とし、内的には、前述した帯曲輪内における移動の調整策を果たすものと考えられる(特に東の櫓台)。

虎口通過後の導線を考えてみても、「内枳形」特有の「クランク走向」を強く設定しているわけでもなく、開口部を通過してから「T字」に行き先が振り分けられているに過ぎない。これも杉ノ城の、帯曲輪群から曲輪Cに入ってからA・B郭を中心とする左右二つのエリアに分岐する導線設定と、骨子はさほど変わらない。帯曲輪の塁線中腹に付設しただけの虎口であるのだから、櫓台の有無に関わらず、そうしたコース取りになるのは自明である。

そして、何より重視すべきは、虎口「空間」としての閉鎖性・完結度の非常な脆弱さで、塁線自体の折曲と組み合わせにより封鎖性の高い虎口を形成する、豊臣氏の城郭の縄張りにおける規範的手法とは、大きく相違していると言わざるを得ない。一方、開口部に至る「つづら折れ」のスロープを俯瞰するように、東側の櫓台から堅堀とセットで石塁を延ばす工夫などは、この城の防備発想の最終的成熟度を示す技巧と言って良い。戦国大名大友氏の築城技法の到達点を、素直にそこに見るべきであろう。この他にも、高良山陣所群と共通する構造上の特徴は多々あり、高崎城の最終形態の形成をめぐっては、上記の視点から改めて慎重な検討を行うべき余地を残している。

註

- (1) この種の防衛ライン完備の発想は、武家社会下で古くから具体化していたことが、現存する奥州藤原氏の阿津賀志山防塁(福島県)、『太平記』に記される近江坂本の足利方陣所などから理解できる。確かに戦国期における北部九州の城郭の特徴を考える上で留意すべきプランの一つではあるが(木島孝之・中西義昌「天正・中後期の北部九州における城郭の様相」『戦国の城と城下町Ⅱ』鳥栖市教育委員会1998)、山内上杉氏の高山城(群馬県)、今川氏の賤幡山城(静岡県)など他地域の拠点城郭にも同じ意識は内在しており、決して九州「固有」の理念ではない。したがって、これのみで大友氏ないし県下の城郭の個性を特定できるものではない。むしろ注目したいのは、陣所の縄張りに摘要されている「守り」優先の基軸が大友氏本城にそのままスライドしている点で、高崎城の最終的な利用目的を考察する上では重要な意味を持つ。
- (2) 妙見嶽城に関しては永禄2年(1559)に宗麟(義鎮)が改修している点(8月7日付・田原親賢宛宇佐宮一社中連署申状案「到津文書」〔『編・大』20〕)、天正7年(1578)に田原紹忍らをして再普請させている点(3月27日付・香志田兵部丞宛大友義統書状「香下要氏蔵文書」〔『編・大』25〕、他)、天正14年10月の島津軍府内侵攻まで在番が確認できる点(10月12日付・佐田鎮綱宛大友義統書状案「宇都宮文書」〔『編・大』27〕)などから、各段階の遺構の混在が想定できる。城の南東端と北西尾根に付設された畝状堅堀群には、横堀や帯曲輪と連動する部分も存在する。
- (3) 木島孝之「九州における織豊期城郭－縄張り構造にみる豊臣氏九州経営－」(『中世城郭研究』6 1992)など。
- (4) 安心院町の龍王城には、細川氏時代の石垣とは別に、自然石を主体とした残存高2m余の石垣が主郭南側壁面の一部で観察できるが、現時点で実見できる遺構の中では、これが大友氏の自得した近世的石積技術の成果として、唯一検討の俎上に乗せられる存在である。石材寸法の規格性は低く間隙の多い配石ではあるが、「面合わせ」の意識が現れており勾配角度の調節技法も見えて取れ、小規模ながらも高崎城の技術水準を凌駕している。天正15年の豊臣政権からの城領安堵以後、文禄2年の改易までの間に、義統がこの城の再整備に着手していた可能性を暗示する遺構である。
- (5) 11月21日付・賀来社大宮司宛大友義統書状案『大友文書録』所収文書(『大分県史料』33)。